

J. ローゼンミュラー (1619-84) のミサ曲

一ボーケマイヤー・コレクションにおける協奏風ミサ曲の研究

園田 順子

ドイツ人作曲家ヨハン・ローゼンミュラー (1619-84) の声楽作品研究は、これまで主として、ヴェネツィア期のラテン語による詩篇曲に関心が向けられてきたのに対し、本稿では、いまだ手つかずの状態にある協奏風ミサ曲を対象としている。

ローゼンミュラーがヴェネツィアで作曲したラテン語の詩篇曲は、彼の創作の頂点に位置し、ドイツ教会カンタータの歴史的発展に影響を与えたことが知られている。それに対し、彼のミサ曲は、ほとんど研究対象とはされなかったものの、次世代のルター派の作曲家たちに影響を与えている。それゆえここでは、特に協奏風ミサ曲に関して、ヴェネツィア期の詩篇曲との比較研究の観点から、その音楽的特徴を考察していく。

この考察によって、ライプツィヒ時代の作品には認められなかったヴェネツィア時代のミサ曲における音楽的特異性が、明らかになった。その音楽的特異性とはすなわち、重唱、独唱、合唱、弦楽アンサンブルといった様々な表現手段を用いた論理的構造、フィグーレンレーレに基づく不協和音程の使用、および次々と転調を繰り返しながら展開する調性的和声である。特に、金管楽器が旋律楽器としての役割をもつこと、およびエコー書法は、ヴェネツィアの影響を明確に示しており、この特徴は、協奏風ミサ曲にもラテン語の詩篇曲にも見られるものである。

さらに、ローゼンミュラーのミサ曲は、17 世紀末から 18 世紀初頭におけるドイツの教会や宮廷の財産目録に数多く存在しており、その点からも、彼のミサ曲が、他の声楽作品と同等な音楽的評価を得るに値することが示される。